

## 三、青襷隊の蠻行と其影響

川崎造船所が前記十五名の委員を誡首せるの一事は事態を險惡に赴かしむるの結果を生じ延々神戸労働争議を彼の如く大事件たらしむるの因を爲すに到ると稱せらる。

七日早朝誡首されたる電気工作部青柿外六名造船工作部野倉氏等は二週間の労働権を楯に入場せんとして守警の拒否に逢ひ頻に押問答中後方より押し來れる職工團の雪崩れに其儘入場し、青柿等は電気工作部全職工を集め「自分等は御承知の如く會社から誡首されたので最早會社内にて思ふやうに活動する譯にゆかず、従つて今後諸君等の委員として適當な交渉をする譯に行かない、今後は諸君の間で委員を選定し充分争議の意義を徹底さして欲しい」と挨拶を述べたるが、夫れと見たる會社は万一を慮り所轄相生橋署へ「只今青柿、野倉等が職工を集めて煽動演説を始め混亂の恐れがあるから至急出張を乞ふ旨」と電話する處あり、同署は之に對して「未だ騒亂の程度に至らない箇處に警官を派出するのは反つて形勢を悪化する恐れある許りでなく殊に工場外なれば兎も角工場の出來事は成るべく會社側で鎮めて貰ひたい」旨を答ふると共に五十餘名の警官を同署樓上に集め万一に備えたり。

斯くして午前九時、電気工作部職工諸幹部は所内焼附職場一室に集合し警保、連絡、通信の各整理委員を設け、秩序維持を計り更に電気工場裏に全員を集合せしめて隊列を作り造船、造機各部を練りて

示威運動に努め、造機、造船の大部亦之に呼應して怠業状態に入る。此間に青柿、野倉等誡首されし交渉委員は造船所本社に永留重役を訪ひ「前日交附の辭令中『都合に依つて』とあるは如何なる意味なるや、自分等を不都合と認めてか」と解職理由を訊し、永留重役は「不都合と認めしものに非ず、只單に會社の都合に依るもの」と答えて物別れとなれり。午後二時前後に至るや怠業中の職工中一部は今回の争議に關して役付職工は餘りに冷淡に過ぐと憤慨の氣勢を示し伍長其他役付との間に争論起れる結果一工長を殴打負傷せしめる等何れも殺氣満々として凄壯の氣に滿つる折柄兵庫分工場職工五百餘名が示威運動の爲め本社に來社するとの情報に接したるため電気、造船、造機等の數千名は之れを迎ふべく何れも喊聲を揚げ同所門際まで雪崩の如く殺到したり。此際浴衣がけに青の鉢巻をし或は厚司の腕に青布を纏ひ或は業々しく青襷をかけたる一隊數十名の壯漢現れ、兵庫分工場の一行を迎へんとする本社職工と之に加はらんとする職工の間を遮り、青襷隊と職工とは物凄き渦を作りて大亂闘を開始し瓦礫飛び棍棒舞ひ叫喚怒號の修羅場を演出し青襷隊壯漢の手に振り上げられたる匕首、短刀は幾度か職工の群に加えられたる結果、電気工作部職工國方曉一氏は左背部より尖先深く長さ五寸深さ内臓に達する重傷を負ひ更に同部職工久米己之助、岡田某外一名も背部に重傷し輕傷十數名に上れり。その負傷者は何れも職工團の手にて縣立病院に收容し手當を施せり。青襷隊に就て會社は最後まで、「會社と何等諒解なき暴行」なる旨を言ひ張れり。即ち會社にペンキ塗を請負ひて出入せる片福組の